

昭和の人間 深谷孝夫

夜のとばりが辺りに漂いはじめると

その機会をはじめから期待していたように

コンビニのような人待ち顔の

冷蔵庫を開ける

食料の乏しい時代を経験している

幼い記憶が蘇えるのか

女房の心配りが

ぎっしりと詰まっているのだ

無駄な買い物しているなど

内心思っているが

ともにひもじかった時代を共有している

わたしは文句もいえず

ただ黙って

ほろ酔い加減に身を任す

ほんのり染まったからだに

眠気が押し寄せ手枕をしていると

暗幕が下りてきて

セピア色の人生に彩られた残像が

古希の歳月を身にまとい

悔恨の狭間でゆらめいている

そのゆらめきから

眼が覚めたわたしは

やり残したものはないかの想いと

結婚を忘れた息子たちへの愚痴を

納豆に入れて掻き混ぜるが

気に入るような糸がひいてこない

諦めかけているところへ

女房が手伝う

更に糸は粘り気を増してくる

もう「しょうがないわよね」と

いいながら薬味を入れ

連れ添った女房の想いを糸に絡めて

わたしはご飯にかけて食べる